天慶の乱と承平天慶の乱(二)

寺内　浩

明治になると近代的な歴史学研究が始まり、将門純友の乱研究は新たな段階に入る。本章では、そうしたなかで将門純友の乱の呼称がどのように変わっていったのか、またそれはなぜなのかを考えていきたい。

表3は、管見に及んだ限りではあるが、概説書を中心に、将門純友の乱がどのように称されているか、また承平年間を中心に純友の動きがどのように叙述されているかを調べたものである。

五　明治―戦前における将門純友の乱（一）

一八八七年（明治二〇）帝国大学に史学科が設置され、リースが着任する。周知のように、リースはランケ流の実証主義を導入するとともに、史学会を創立し、史学（会）雑誌を発刊した。一八八九年には国史学科が設置され、重野安繹・久米邦武・星野恒の三教授が任命される。[21] こうして近代アカデミズム史学は確立していくのだが、こうしたなかで用いられた将門純友の乱の呼称は天慶の乱であった。重野安繹・久米邦武・星野恒編『国史眼』は明治初期の考証史学を代表する通史で、帝国大学文科大学国史学科の教科書とされたものだが、[22] そこでは両乱の経過を述べたあと「是ヲ天慶ノ乱ト曰フ」としている。同時期の『史学会雑誌』に発表された三浦録之助（周行）、坪井九馬三の論文も「天慶の乱」「天慶乱」とされている。[23] また、その頃出版された松井広吉、山名留三郎、乙黒直方、福田久松、小林鐵之輔、大和田建樹の著書でも天慶の乱の呼称が用いられている。

表３　明治ー戦前期の概説書

著者	書名	出版社	発行年	乱の呼称	承平年間の純友
松井　広吉	日本帝国史	博文館	1889	天慶の乱	海賊討伐の功あり、任満後も還らず
山名留三郎	本朝史要		1889	天慶の乱	伊予掾となるも、任満ちて帰らず、盗をなす
史学会	稿本国史眼		1890	天慶の乱	伊予掾となり淑人と海賊追捕、任満ちて帰京せず
乙黒　直方	日本新歴史	富山房	1891	天慶の乱	－
福田　久松	大日本文明略史		1891	天慶の乱	かつて海賊討伐の功あり、任満後も還らず
小林鐵之輔	大日本帝国全史		1892	天慶の乱	朝廷の命により海賊を追捕、任満ちて帰らず、海盗をなす
有賀　長雄	帝国史略	牧野書房	1893	承平天慶の乱	承平天慶の間に謀反
大和田建樹	新体日本歴史	博文館	1894	天慶の乱	－
竹越与三郎	二千五百年史	開拓社	1896	－	承平年中に海賊討伐、任満後も帰京せず、承平６年に日振島によって劫掠
萩野　由之	大日本通史	博文館	1899	将門純友の乱	承平中海賊を追捕、任満ちて帰京せず、日振島によって官物を掠める
歴史及地理講習会	国史講義	吉川弘文館	1902	天慶の乱	純友は承平４年に叛す
本多浅治郎	日本歴史講義	金刺芳流堂	1904	承平天慶の乱	任満ちて帰京せず、承平４年に海賊の首領となり日振島による
日本歴史攻究会	参考日本歴史	魚住書店	1906	天慶の乱	－
池田　晃淵	平安朝史	早稲田大学出版部	1907	将門と純友の乱	任満後も帰京せず、日振島によって海賊の首領となる、承平６年に紀淑人が追捕
有賀　長雄	大日本歴史	博文館	1907	承平天慶の乱	承平年中淑人と共に海賊追捕、任満後も帰京せず、日振島で掠奪を事とする
笹川　種郎	帝国史講義	内田老鶴圃	1907	承平天慶の乱	承平４年に任満後も帰らず海賊の長となり、日振島によって官物を掠める
黒板　勝美	国史の研究	文会堂書店	1908	承平天慶の乱	承平に任満後も帰京せず沿海を劫掠
青木　武助	参考日本大歴史	宝文館	1909	承平天慶の乱	承平年中淑人と共に海賊追捕、承平４年任満後も帰京せず、海賊を集めて劫掠す
久米　邦武	裏面より見たる日本歴史	読売新聞社	1911	天慶の乱	－
高桑　駒吉	日本通史	弘道館	1912	承平天慶の乱	承平年中淑人と共に海賊追捕、任満後も帰京せず日振島によって劫掠をなす
青木　武助	校訂大日本歴史集成	隆文館	1913	承平天慶の乱	承平年中淑人と共に海賊追捕、承平４年任満後も帰京せずに日振島によって劫掠をなす
吉田　東伍	倒叙日本史　九	早稲田大学出版部	1913	天慶の兵乱	承平中に海賊を追捕、任満後も帰京せずに多くの人衆を率いる
岡部　精一・高橋　与惣	大日本歴史	大同館書店	1913	承平天慶の乱	承平年中淑人と共に海賊追捕、任満後も帰京せず、海賊を集めて瀬戸内沿岸を劫掠
吉田　東伍	地理的日本歴史	南北社	1914	純友将門の乱	任満つるも帰京せず、海賊の首領となって沿海を劫掠
高桑　駒吉	日本歴史通覧	実業之日本社	1916	承平天慶の乱	淑人と共に海賊追捕、承平4年任満後も帰京せず、海賊を集めて沿岸を劫掠
新保　磐次	趣味の日本史	金港堂	1916	承平天慶の乱	伊予掾として海賊を追捕、任満後も帰らず日振島による
黒板　勝美	国史の研究	文会堂書店	1918	純友将門の乱	承平に任満後も帰京せず沿海を劫掠
川上　多助	国史講習録平安朝史	国史講習会	1918	天慶の乱	任満ちても帰京せず海賊賊首となり、官物を劫掠、承平６年に追捕宣旨を受け、帰順
高橋　俊乗	国民日本歴史	富山房	1918	承平天慶の乱	任満後も還らず海賊を率いる
長沼　賢海	参考日本歴史	博文館	1919	承平天慶の乱	承平中に海賊を討つが、任満ちて帰らず
萩野　由之	註釈日本歴史	博文館	1919	天慶の乱	－
大森金五郎	大日本全史	富山房	1921	承平天慶の乱	海賊を討つが、任満後も帰らず、日振島により人衆を率いる
中村徳五郎	新らしき研究日本歴史	松雲堂	1921	天慶の乱	紀淑人と海賊を追捕するが、任満ちて帰らず
高須　梅渓	国民の日本史三平安時代	早稲田大学出版部	1922	天慶の乱	承平４年に反、承平３年に伊予掾となり海賊を追捕するが、海賊の仲間に入り、任満後も帰京せずに沿海を横行
栗田　元次	綜合日本史概説	中文館	1926	将門純友の乱	－
太田　亮	日本史精義	文献書院	1926	天慶の乱	任満後も帰らず、海賊を追捕するが、逆に賊の首領となる
川上　多助	綜合日本史大系三平安朝史	内外書籍	1930	承平天慶の乱	任満ちても帰京せず、承平６年には海賊首となる、淑人が海賊平定のため、純友に追捕宣旨を賜い、懐柔
黒板　勝美	更訂国史の研究	岩波書店	1932	承平天慶の乱	承平４年任満後も帰京せず海賊の首魁となり沿海を劫掠
下村三四吉	平安朝史	日本文学社	1932	天慶の乱	承平６年に淑人の下僚として伊予に下る、任満ちても帰京せず、海賊の首魁となり、日振島によって掠奪を事とする
斉藤　斐章	日本国民史	賢文館	1933	天慶の乱	－
白柳　秀湖	民族日本歴史	千倉書房	1935	天慶の乱	淑人と共に海賊を追捕
魚澄惣五郎	日本史新講	星野書店	1936	承平天慶の乱	任満後も帰京せず、承平４年には日振島により沿海を劫掠
桜井時太郎	国史大観　二	研究社	1936	承平天慶の乱	承平６年以前に反、承平６年懐柔のため海賊追捕を命じられる
川上　多助	日本歴史概説	岩波書店	1937	天慶の乱	任満後も帰らず日振島により官物を掠奪、承平６年に一旦降伏
国民精神研究会	国史と時代の人々	国民図書協会	1938	天慶の乱	－
古田　良一	概観日本通史	同文書院	1939	承平天慶の乱	－
高須芳次郎	紀元二千六百年史物語	新潮社	1939	天慶の乱	海賊平定に当たるが、任満後も帰京せず、承平６年に反乱をおこす
田名網　宏	新講大日本史三平安時代史	雄山閣	1940	承平天慶の乱	承平６年淑人と共に海賊追捕、任満後も帰京せず、日振島によって海賊首となり、掠奪を事とする
本宮　泰彦	増補参考新日本史	富山房	1943	承平天慶の乱	淑人と共に海賊追捕、任期後も帰京せず、海賊の巨魁となる
市村其三郎	日本史概	堀書店	1943	承平天慶の乱	－
鮎沢信太郎	国史集説	照林堂	1944	承平天慶の乱	承平年中に海賊追討の官命を受けるが、任満後も帰京せず、日振島によって海賊首となる

このように明治二〇年代頃までは乱の呼称はほとんどが天慶の乱だったのだが、明治三〇年代以降は乱の呼称として天慶の乱よりも承平天慶の乱の方が多く用いられるようになる。これはいかなる理由によるのであろうか。

将門純友の乱のうち、将門の乱については、乱の評価はともかく、乱の過程自体については著者により大きな違いがあるわけではない。つまり、内容に精粗はあるものの、いずれの著書も当初は一族間の内紛であったものが常陸国庁襲撃以降は国家への反逆となっていくと叙述している。これは、明治になると星野恒「将門記考」（『史学会雑誌』二、一八九〇年）など『将門記』の学問的研究がすすみ、『将門記』が将門の乱研究の中心史料として幅広く共有されたためであろう。したがって、承平天慶の乱が呼称として用いられるようになる理由が将門の乱の方にあるとは思われない。私見では、承平天慶の乱が使われるようになる主な要因は純友の乱の過程についての認識の変化にある。

前章でみたように、近世後期になると『大日本史』の影響を受けて承平六年の純友が海賊であったとするものはみえなくなり、明治に入っても同様の状況は続く。『大日本史』では承平六年の純友は紀淑人と共に海賊の追捕にあたっており、反乱を起こしたのは天慶二年であるとしているのだが、明治二〇年代まではこうした考え方が主流であった。たとえば『国史眼』に「藤原純友ハ伊予掾ト為リ、国守紀淑人ト海賊ヲ追捕シ」、三浦録之助「天慶の乱を論ず」では「天慶二年に至りて純友が海賊の乱は起りぬ、（中略）彼は前海賊の乱に當りて之を追捕すべき宣旨をも蒙りたるものにて」とある。

しかしその後は、純友が海賊を追捕していたことに触れずに当初から純友は海賊の首領であったとするものや、海賊追捕に触れたとしても承平四年あるいは承平六年には純友が海賊の首領になっていたとするものが増えていく。前者の例として、本多浅治郎『日本歴史講義』には「伊予掾藤原純友は任期満つれども帰らず紀元一五九四年（承平四年）自ら海賊を集めて其巨魁となり日振島を根拠として南海、山陽の沿海を劫掠すること数年、平将門が下総に拠りて乱を

作すに及び遙に之に応じて益、奪略を恣にせり」とある。また笹川種郎『帝国史講義』には「朱雀天皇の承平四年（一五九四）に伊予掾藤原純友なるもの、任満つれども還らずして、自ら海賊の長となり、日振島を根拠地とし、官物を掠め、官舎を焼き、公然海賊の大合同をなしたり」とある。

後者の例としては、青木武助『校訂大日本歴史集成』に「朝廷にては、紀淑人を伊予守に任じこれを追捕せしめ給へり。時に純友は伊予掾なりければ、淑人をたすけて追捕に従事したりしが、既にして、賊等、淑人の威信に服して降参したりき。然るに純友は異謀を蓄へ、承平四年国司の任期満ちたるも京師に還らず、海賊を集めて南海・山陽の二道を劫掠し、日振島（中略）に拠る。」とあり、また高桑駒吉『日本歴史通覧』には「初め純友は伊予掾となりて伊予守紀淑人と共に、南海の海賊を討ちしが、承平四年純友異図を蓄へ、任満つれども帰国せず、海賊を集めて反を企て南海山陽の沿岸地を掠め」[24]とある。

このように、純友が海賊を追捕していたことがみられなくなるのに対し、承平年間からすでに純友は海賊の頭領となり日振島を根拠地に南海山陽両道沿海を劫掠していたとする論調が強まっていくのだが、そうした結果純友の乱は承平年間に始まるとする考え方が出てくるのは自然なことであろう。たとえば、歴史及地理講習会『国史講義』には「純友叛承平四年、将門叛天慶二年」とある。また本多浅治郎『日本歴史講義』では「承平の乱」の項に先掲の文章を含む純友の乱の経過が、次いで「天慶の乱」の項で将門の乱の経過が書かれていて、純友の乱―承平の乱、将門の乱―天慶の乱という捉え方がなされている。さらに、高須梅渓『国民の日本史三平安時代』では「時の遅速から云ふと、純友の乱が将門の乱よりは少し早く爆発した。純友は承平四年に、南海に於て叛旗を翻したのだ。」と述べられている。

こうしたことと関係すると思われるのが、将門の乱と純友の乱の叙述の先後である。『国史眼』や三浦録之助「天

慶の乱を論ず」以来、将門純友の乱の叙述にあたっては将門の乱を先に述べるのが一般的なのだが、純友の乱を先に述べるものもいくつかみられるようになる。先述した本多浅治郎『日本歴史講義』がその典型だが、この他竹越与三郎『二千五百年史』、池田晃淵『平安朝史』、吉田東伍『地理的日本歴史』、高須梅渓『国民の日本史三平安時代』でも純友のことが先に述べられている。これは純友の乱が将門の乱より先に承平年間に起きたと考えられていたためであろう。ちなみに吉田東伍『地理的日本歴史』では「純友将門の乱」となっている。

最後に、黒板勝美『国史の研究』[25]を取り上げてみたい。この本は「日本史研究の入門書をかねた概説書」で、一九〇八年、一九一八年、一九三一―三六年の三度にわたり刊行され、初版は「同種の書物がなかったので世の歓迎をうけ、日本史研究の羅針盤であり、研究者必携の書と推賞せられた」。また三版は「第二次世界大戦までの日本歴史研究を指導した意義は大きい」とされている。まず、一九〇八年の初版を見ると、目次には「承平天慶の乱」、本文には「承平には伊予大掾藤原純友任満つて帰らず、沿海を劫掠するあり、天慶には平将門興世王等の乱あり」とあり、純友の乱が承平年間、将門の乱が天慶年間と考えられていたことがうかがえる。一九一八年の二版では、本文は同じだが、目次が「純友将門の乱」に変わっていて、純友の乱が先行するとされていたことがわかる。一九三二年の三版では、目次が「承平天慶の乱」「将門の叛乱の概説」「藤原純友また叛す」「将門純友の乱平ぐ」となるが、本文では純友の乱の叙述が「承平天慶の乱」の前になされている。そこでは「承平四年には西に伊予大掾藤原純友任満つるも帰らず、海賊の首魁となって沿海を劫掠せるあり、一時紀淑人によってそれらの海賊を綏撫し得たけれど、天慶二年また純友の再挙と時を同じくして東に平将門の叛乱起り、武士の活動始めて史上に現れて来た。」と述べられている。三版では叙述が詳しくなり、著者の考えがより明確にあらわされているが、純友が海賊を追討していたことには触れられていない。また、著者は承平四年には純友が海賊の頭目となって沿海を劫掠していたとするのだが、「藤

原純友また叛す」「純友の再挙」という言い方からすれば、純友の乱が承平年間から始まると考えていたことは明らかである。

以上のように、明治三〇年代以降は純友が承平六年に海賊を討伐していたことにあまり触れられなくなり、逆に承平年間からすでに海賊であったことが強調されるようになる。こうした結果、承平年間の純友と天慶年間の純友の違いがあいまいになって、純友の乱が承平年間から始まるとされ、乱の呼称も承平天慶の乱が用いられるようになっていくのである。[26]

六　明治―戦前における将門純友の乱(二)

本章では、明治―戦前の小学校・旧制中学校（以下では中学校とする）の教科書にみえる将門純友の乱についてみていくことにしたい。なお、いずれの教科書も将門と純友が反乱を起こしたことが簡単に記されているだけで、内容面での差異はあまりない。したがって、以下では将門純友の乱の呼称を中心に調べることにする。[27]

表4は小学校の教科書にみえる乱の呼称を表にしたものである。[28]これを用いていくつかの時期に分けて考察を行っていきたい。

明治初年に小学校が発足した頃、教科書として使用されていたのは『日本外史』、『国史略』、『王代一覧』などであった。しかし、これらはいずれも本来小学校の教科書として編集されたものではないため、小学校の目的と必ずしも合致してはいなかった。そこで一八七二年（明治五）に文部省が編集・刊行したのが『史略』である。『史略』はいわば最初の小学校日本史教科書であり、三年後の一八七五年には『史略』の内容を充実させた『日本略史』が同じ

く文部省から刊行された。『史略』や『日本略史』は多くの小学校で教科書として用いられたが、当時は教科書の使用についての規定はなく、教師が適当であると考えたものが教科書として使われていた。このため現場ではいくつもの種類のものが教科書として用いられていた。南摩綱紀『内国史略』、上羽勝衛『日本史略』、棚谷元善『国史攬要』、笠間益三『日本略史』、田中義廉『日本史略』などがそれである。

表4によって明治一〇年代までの教科書をみてみると、当初は乱の呼称がないものが多い。これは、『日本外史』『日本政記』を除けば一九世紀以降の歴史書にはいずれも乱についての呼称はみえないので、それが踏襲されていたのであろう。乱の呼称がある教科書では、天慶の乱と承平天慶の乱の両方がみられるが[29]、明治一〇年代になるとほとんどが天慶の乱とされていることがわかる。

一八八一年、小学校教則綱領が制定され、歴史の教科内容は建国の体制から明治新政府まで八つの項目から編成することが定められた。また、一八八六年からは教科書検定制度が始まった。このように教科書の内容が次第に整えられていくのだが、こうしたなかで一八八七年に実施されたのが歴史教科書編纂旨意書による歴史教科書の公募である。これは文部省の示す方針によって教科書を編集させようとするもので、重野安繹・末松謙澄・外山正一・伊沢修二・物集高見の五名が委員となり、歴史教科書を編集するための編纂旨意書がつくられた。一例としてあげられた目次をみると、全体は一二篇からなり、第四編の細目は「藤原氏、醍醐天皇、菅原道真、天慶ノ乱、才媛輩出、前九年ノ戦、後三条天皇、政治及風俗」（傍線は筆者）となっていて、乱の呼称は天慶の乱とされている。この教科書公募によって採択され、文部省から刊行されたのが神谷由道の『高等小学歴史』である。もちろんこの教科書は天慶の乱としている。この文部省による歴史教科書編纂旨意書の公表と検定制度により明治二〇年代半ばには教科書の編集形式と内容はほぼ定まったものとなる。こうしたことによりこれ以降乱の呼称は天慶の乱でほぼ統一されるのである。

揚春樹『新撰日本歴史』	1888	○
阿部弘蔵『学校用日本歴史』	1888	○
青山正義『小学古今史話』	1889	○
杉浦重剛『日本通鑑』	1889	−
石橋奎『記事本末国史提要』	1889	○
松本貢『尋常小学日本小歴史』	1891	○
文部省総務局図書課（神谷由道）『高等小学歴史』	1891	○
田中登作『日本歴史大要』	1891	○
岡村増太郎『尋常小学校用日本歴史』	1891	○
金港堂編輯所『小学日本史略』	1891	○
松田直一『小学校用日本歴史読本』	1891	−
黒瀬重暉『小学日本史要門』	1891	−
浅井政綱『小学日本歴史稿本』	1892	○
谷口政徳『参考日本歴史講義』	1892	○
山形悌三郎『帝国小史』	1892	○
萩野由之『小学国史眼』	1892	○
田中登作『高等小学古今事歴』	1892	○
畠山健『小学歴史入門』	1892	−
天野為之『日本小歴史初歩』	1892	○
石橋臥波『小学生徒日本地理歴史新書』	1892	○
松本愛重『尋常小学日本歴史談』	1892	○
太田百祥『小学帝国史談』	1892	○
増田千信『高等小学日本歴史』	1892	○
金港堂編輯所『小学史談』	1892	−
生田目経徳『尋常科用日本歴史』	1892	○
秦政治郎『日本帝国歴史』	1892	○
永江正直『絵入日本歴史』	1893	○
岡村増太郎『高等小学新歴史』	1893	○
東久世通禧『高等小学国史』	1893	○
教育学館『小学日本歴史』	1893	○
森孫一郎『高等小学日本歴史』	1893	○
大槻修二『国史要略』	1893	○
黒木安雄『小学校用日本史談』	1893	−
東久世通禧『小学国史談』	1893	○
大村芳樹『新定日本歴史』	1893	○
育英舎『小学日本歴史初歩』	1893	○
今泉定介『初等日本歴史』	1893	−
金港堂『小学校用日本歴史』	1894	○
育英舎『小学日本歴史』	1894	○
山県悌三郎『帝国小史第三学年用』	1894	○
松本貢『本朝史要』	1894	○
斉藤斐章『新体日本歴史初歩』	1894	−
烏山譲『小学校用新日本小史』	1894	×
小林義則『初学史談』	1894	−
岡村増太郎『小学校用日本歴史』	1894	○
岩崎申吉『高等小学科日本歴史』	1894	○
江見勇次郎『日本歴史草稿』	1894	−
郡保宗『高等小学日本史』	1895	○

山形悌三郎『増補帝国小史』	1896	○
山県悌三郎『新撰帝国小史』	1897	○
池村鶴吉『初等教科日本小国史』	1897	○
棚橋一郎『日本歴史』	1897	○
塙鍵蔵『新体日本小史』	1898	○
学海指針社『新撰帝国史談』	1899	−
小林弘貞『新撰日本小史』	1899	○
普及舎『小学国史』	1900	○
新保磐次『小学内国史』	1900	×
山県悌三郎『修正新撰帝国小史』	1901	○
新保磐次『修正小学内国小史』	1901	○
東久世通禧『小学国史』	1901	○
前橋孝義『日本歴史』	1901	○
中根淑『修正小学日本国史』	1901	○
学界指針社『修正新撰帝国史談』	1901	−
育英舎編輯所『小学日本国史』	1901	○
金港堂編輯所『小学校用修正日本歴史』	1901	○
教育同志会『新撰小学国史』	1901	○
右文館『高等小学日本歴史大要』	1901	○
国光社編輯所『新撰小学国史』	1902	○
帝国書籍編輯所『歴史教科書』	1902	○
文学社編輯所『小学歴史教科書』	1902	○
文部省『小学日本歴史』	1903	−
文部省『小学日本歴史　巻三』	1903	○
文部省『小学日本歴史第三学年用』	1904	○
文部省『尋常小学日本歴史』	1910	−
文部省『高等小学日本歴史』	1910	○
文部省『尋常小学日本歴史』	1911	−
文部省『高等小学日本歴史』	1911	○
文部省『尋常小学国史』	1920	−
文部省『高等小学国史』	1924	○
文部省『尋常小学国史』	1934	−
文部省『高等小学国史』	1938	○
文部省『高等小学国史第三学年用』	1939	○
文部省『小学国史尋常科用』	1940	−
文部省『初等科国史』	1943	−
文部省『高等科国史』	1944	−

＊　○は天慶の乱、×は承平天慶の乱

表４　明治－戦前期の小学校教科書

著　者　・　書　名	年次	呼称
大槻東陽『皇朝歴代沿革図解』	1870	－
南摩綱紀『内国史略』	1872	－
文部省『史略』	1872	○
沖修『訓蒙皇国史略』	1872	－
小林虎『小学国史』	1873	－
海軍兵学寮『日本志略』	1873	－
村松良肅『皇朝仮名史略』	1873	－
清原道彦『国史訓蒙』	1873	○
森立之『歴朝史要』	1873	○
大屋愷敍『皇統小史』	1873	－
関吉孝『本朝略史』	1874	－
亀谷省軒『国史提要』	1874	－
文部省『改正史略』	1875	×
木村正辞『日本略史』	1875	×
大槻東陽『啓蒙国史略』	1875	－
小杉雅三『訓蒙国史略』	1875	－
上羽勝衛『日本史略』	1875	－
村井清『日本史略』	1875	－
松浦果『小学国史略』	1875	○
西村兼文『訓蒙国史集覧』	1875	－
棚谷元善『国史攬要』	1876	－
市岡正一『校正日本史略』	1876	－
西野古海『小学日本史略』	1876	－
鈴木重遠『髄頭日本史略』	1876	－
水渓良孝『日本史略』	1876	－
河村与一郎『日本史略』	1876	－
笠間益三『日本略史』	1877	○
笠間益三『髄頭日本略史』	1877	○
藤本箭山『小学国史略』	1877	－
田中義廉『日本史略』	1877	－
草場廉『国朝史略』	1877	－
木村正辞『国史案』	1877	○
河村与一郎『訓蒙挿画仮名国史略』	1877	－
青木輔清『皇武史略』	1878	○
堤正勝『標註国史要略』	1878	×
伊地知貞馨『小学日本史略』	1879	－
川島楳坪『古今紀要』	1879	○
荒野文雄『標注小学日本史略』	1880	○
土方幸勝『日本国史略』	1880	○
小林義則『小学日本歴史』	1880	○
藤田久道『漢文日本略史』	1881	－
笠間益三『新編日本略史』	1881	○
山名留三郎『小学国史集要』	1881	－
笠間益三『新刻小学日本略史』	1881	○
藤井次郎『小学国史略』	1881	－
石村貞一『小学科本日本略史』	1882	○
笠間益三『髄頭新撰日本歴史』	1882	○
石村貞一『小学日本歴史』	1882	○
近藤瓶城『小学国史略』	1882	○
椿時中『小学国史記事本末』	1883	－
伊地知貞馨『増定小学日本史略』	1883	－
三橋淳『史学教授本』	1884	－
木村敏『国史提要』	1884	－
椿時中『小学本邦歴史』	1884	○
笠間益三『小学日本史』	1884	○
栗田勤『新刻日本史略』	1885	○
杉浦重剛『国史初歩』	1885	○
高橋源太郎『小学歴史問答摘要』	1885	○
森孫一郎『学校用日本史略』	1885	○
宮本茂任『小学日本略史』	1885	○
小幡篤次郎『小学歴史階梯』	1886	○
岡本監輔『国史紀要』	1886	○
近藤瓶城『初学日本略史』	1886	○
古谷傳『日本史要』	1886	○
岡本賢蔵『国史捷録』	1886	○
森本確也『本邦歴史』	1886	○
三島毅『小学日本史』	1886	○
長尾槇太郎『尋常小学日本歴史』	1886	○
野沢玄宣『小学日本歴史』	1886	○
伊地知貞馨『増定小学日本史略』	1886	－
笹本恕『前科小学帝国史』	1887	○
大槻文彦『日本小史』	1887	○
辻敬之『小学校用歴史』	1887	○
堤正勝『皇朝史鑑』	1887	○
信夫恕軒『初学日本史』	1887	－
柏倉一徳『高等小学日本歴史』	1887	○
志賀二郎『国史要略』	1887	○
笠間益三『新撰日本略史』	1887	○
小幡篤次郎『小学国史』	1887	○
中原貞七『新撰国史』	1887	○
森孫一郎『訂正学校用日本史略』	1887	○
信夫恕軒『国史概略』	1887	○
吉田利行『日本略史』	1887	○
蒲生重章『小学国史概要』	1887	○
鈴木弘恭『小学日本歴史』	1887	○
原田由己『日本史要』	1887	○
林重治郎『古今史話』	1887	－
笠間益三『皇朝略史』	1888	○
山形悌三郎『小学校用日本歴史』	1888	－
田中義廉『改刻日本史略』	1888	－
新保磐次『小学日本史』	1888	×
藤本真『新撰小学歴史』	1888	○
敬業社『日本小歴史』	1888	○
岡田熊太郎『新撰小学歴史』	1888	○

一九〇三年、小学校の教科書は国定教科書となる。国定教科書は一九四五年の敗戦まで六期にわたり刊行されるが、[30]だいたいにおいて尋常小学校用と高等小学校用の二種類がある（一期は上級学年用と下級学年用）。尋常小学校用では乱の記述は簡略で、呼称は特にない（三期以降は乱の記述自体がなくなる）。これに対し、高等小学校用は記述がやや詳しく、乱の呼称を天慶の乱としている。六期の『高等科国史』にはみえなくなるが、それまでの高等小学校用の教科書はいずれも乱の呼称を天慶の乱としている。

次に、中学校教科書をみていくことにする。表5は中学校教科書にみえる乱の呼称を表にしたものである。[31]この表によると、一八九八年頃までは天慶の乱が圧倒的に多いが、次第に承平天慶の乱が増え始め、やがて承平天慶の乱が多くを占めるようになることがわかる。つまり、明治時代後期以降は乱の呼称が小学校教科書とは異なっていくのである。

中学校では一八八一年の教則大綱で日本史が課されることになった（一八七二年の中学教則の歴史は外国史のみ）。このころの教科書は教師が自由に選ぶことができ、『日本外史』、『国史略』『皇朝史略』のほか『日本略史』『内国史略』など小学校と同じものが教科書として使用されていたらしい。

一八八六年の中学校令により五年制の尋常中学校ができ（一八九九年以降は中学校）、同年から教科書は検定制となった。明治二〇年代になるとさまざまな教科書がつくられるが、そのほとんどが乱の呼称を天慶の乱としている。

一八九八年、尋常中学校教科細目調査報告書が出される。これは、これまで教科についての詳細な規定はなかったため、学校間で不均一が生じないよう「一定ノ準則ヲ定メ中学教育ノ統一ヲ計ルカ為ニ」つくられたものである。調査委員長は外山正一、歴史科調査委員は坪井九馬三・三宅米吉・那珂通世・箕作元八であった。

歴史科の国史細目のうち平安時代の部分は以下の通りである。

平安遷都、蝦夷ノ鎮定、渤海入貢、嵯峨天皇、入唐ノ高僧及新宗派、藤原氏及他氏ノ盛衰、皇族賜姓、摂政関白、菅原道真、延喜時代、承平天慶ノ乱、藤原氏家門ノ争、藤原道長、和歌和文ノ隆盛、刀伊ノ賊、地方ノ乱、前九年ノ役、後三条天皇、白河上皇ノ院政、武人ノ登用、僧徒ノ跋扈、後三年ノ役、風俗、奢侈、服制、保元ノ乱、平治ノ乱、平氏ノ繁栄、諸源ノ挙兵、平氏ノ滅亡（傍線は筆者）

この尋常中学校教科細目はその後修正が加えられ、一九〇二年に中学校教授要目として制定された。この中学校教授要目は各学科目の教授内容を詳細に示したものであり、これにより中学校の教育内容が統一された[32]。日本歴史のうち平安時代の部分は以下の通りである。

平安奠都、蝦夷ノ鎮定、渤海ノ入貢、嵯峨天皇、入唐ノ高僧及新宗派、漢文学及学校ノ設立、藤原氏及他氏ノ盛衰、皇族賜姓、摂政関白、菅原道真、延喜時代、地方ノ状況、承平天慶ノ乱、藤原氏家門ノ争、藤原道長、国文ノ隆盛、工芸、風俗、刀伊ノ乱、地方ノ乱、前九年ノ役、後三条天皇、院政、武人ノ登用、僧徒ノ跋扈、後三年ノ役、源氏、保元ノ乱、平治ノ乱、平清盛、平氏ノ繁栄、諸源ノ挙兵、平氏ノ滅亡（傍線は筆者）

両者をみると、一部に違いはあるが、だいたいは同じである。乱の呼称はいずれも「承平天慶ノ乱」である。

この一九〇二年の中学校教授要目制定により中学校教科書の内容も均一化されたものとなる。そのことは多くの教科書が中学校教授要目に準拠して編纂したことを明記していることから明らかである。表5をみると一八九八年から乱の呼称を承平天慶の乱とするものが増え始める。これは尋常中学校教科細目調査報告書が出されたことによるものである（いくつかの教科書には教科細目に拠ったことが記されている）。そして、中学校教授要目が定められた一九〇二年以降は多くの教科書が承平天慶の乱となる[33]。なお、一九四三年（昭和一八）に中学校も国定教科書となるが、そこでの呼称も承平天慶の乱である[34]。

大森金五郎『中等日本歴史』	1903	×
真崎誠『帝国史綱』	1904	×
峰岸米造『日本略史』	1904	×
笹川種郎『国史要』	1904	×
史学界編輯所『日本史要』	1905	×
野村浩一『国史綱要』	1905	○
辻善之助『新編国史教科書』	1905	×
依田喜一郎『中学日本歴史』	1905	○
横井時冬『中等教科国史撮』	1905	○
歴史編輯部『中等教科日本歴史』	1905	○
和田万吉『日本歴史』	1905	○
上原益三『中等日本歴史』	1905	×
依田喜一郎『中学日本史綱』	1905	×
下村三四吉『中学本邦史略』	1905	○
藤岡継平『中等日本史』	1906	×
岡部精一『修正日本史綱』	1906	×
上原益蔵『新日本史』	1906	×
原秀四郎編『中等国史教科書』	1907	×
上原益蔵『新日本小史』	1907	○
中村徳五郎『新撰国史提要』	1907	○
笹川種郎『日本小歴史』	1908	×
峰岸米造『新編日本略史』	1908	○
斉藤斐章『統合歴史教科書日本史』	1908	○
大森金五郎『日本歴史教科書』	1910	×
藤田明『中等日本歴史』	1910	○
藤田明『中等日本歴史　訂正三版』	1911	×
三上参次『中等教科にほんれきし』	1911	○
黒板勝美『新訂日本歴史』	1911	×
峯岸米造『中学校用歴史教科書日本歴史』	1911	×
笹川種郎『新編日本史教科書』	1911	×
上原益蔵『新国史』	1912	○
萩野由之『新制中学国史』	1912	×
依田喜一郎『中学日本史』	1912	×
長沼賢海『中等国史略』	1912	×
沼田頼輔『新編日本史要』	1912	×
三浦周行『中等教育日本史教科書』	1913	×
渡辺世祐『新編日本歴史教科書』	1915	×
斉藤斐章『中等歴史教科書日本史』	1915	○×
藤田明『増訂中等日本史』	1916	×
妻木忠太『最新日本歴史解釈』	1917	×
三省堂『中学校用日本歴史教科書』	1917	×
藤岡継平『統一中等歴史教科書日本史』	1917	×
芝葛盛『修訂中学日本歴史』	1917	×
長沼賢海『中等教科皇国史略』	1918	×
斉藤斐章『中学校用統合歴史教科書日本史』	1918	×
朱牟田轍『最新日本歴史詳解』	1920	×
伊木寿一『新国史』	1921	×
松本重彦『普通教育国史教科書』	1921	×

松本重彦『帝国史綱』	1922	×
中村孝也『修正中等日本史』	1922	×
大森金五郎『中等日本歴史教科書』	1923	×
八代国治『新体日本史　一年用』	1923	×
峯岸米造『中学校用日本歴史教科書』	1924	×
幸田成友『新定日本歴史』	1925	○
文献書院編輯部『中等教科新編日本史』	1926	×
斉藤斐章『中等日本史』	1926	×
大森金五郎『中等教育新体国史教科書』	1926	×
峯岸米造『中学校用最新国史』	1926	○×
藤懸静也『中等国史』	1927	×
三省堂編輯所『中等教科日本歴史教科書』	1927	×
芝葛盛『新編中学国史』	1927	×
藤井甚太郎『改訂中学日本歴史教科書』	1929	×
富山房編輯部『上級用中等国史』	1929	○
渡辺世祐『新制国史』	1932	×
古田良一『新制中等国史』	1932	×
栗田元次『新制綜合日本史』	1933	×
大森金五郎『改訂新体国史教科書』	1933	×
笹川種郎『統合新国史』	1933	×
高柳光寿『改訂中等日本史』	1933	×
木宮泰彦『新日本史３・４・５学年用』	1933	×
三省堂編輯所『新制日本史』	1934	×
三省堂編輯所『新定日本史』	1934	×
井野辺茂雄『帝国小史』	1934	○
芝葛盛『新制国史』	1934	○
中村孝也『綜合新国史』	1935	×
辻善之助『三訂新編国史』	1936	×
松本彦次郎『綜説皇国史』	1936	×
三省堂『中学国史教科書』	1937	×
古田良一『新修中等国史』	1937	×
木宮泰彦『新日本史　初級用』	1937	○
八代国治『新体日本史　一年用』	1937	○
八代国治『新体日本史　四年用』	1937	×
芝葛盛『新制皇国史』	1937	○
龍粛『新日本歴史』	1937	×
及川儀右衛門『新修国史』	1937	×
広島高等師範学校附属中学校歴史研究会『新撰国史』	1937	×
長沼賢海『中学校用皇国史』	1938	×
魚澄惣五郎『新修日本史』	1938	×
栗田元次『新体中学綜合国史』	1939	×
幸田成友『新撰日本歴史』	1939	○
清原貞雄『中学国史要』	1941	×
文部省『歴史　皇国編』	1945	×

＊　○は天慶の乱、×は承平天慶の乱
　　○×は両方の呼称がみえるもの

表５　明治－戦前期の中学校教科書

著　者　・　書　名	年次	呼称
林善助『新体日本歴史』	1887	○
嵯峨正作『日本史綱』	1888	○
天野為之『日本歴史』	1890	○
萩野由之『日本歴史』	1891	○
黒崎信『普通日本歴史』	1891	○
秦政治郎『日本帝国歴史』	1892	○
黒川真頼『中等教育日本通史』	1892	○
新保磐次『日本史要』	1893	×
高津鍬三郎『にほんれきし教科書』	1894	○
勝浦鞆雄『皇国史要』	1894	○
宇都宮安明『日本小歴史』	1894	○
岡田辰次郎『中学日本歴史』	1895	○
増田于信『新撰日本小歴史』	1895	○
千阪庸夫『新撰帝国史綱』	1895	○
浜口庄吉『新撰日本歴史』	1895	○
棚橋一郎『中等教育日本史要』	1895	○
大槻文彦『増訂日本小史』	1896	○
田中稲城『中等教科日本歴史』	1896	○
鳥野幸次『中学国史』	1896	○
実学館『中学日本歴史』	1896	○
岡部精一『中等日本歴史』	1896	○
小林弘貞『中学教科帝国史綱』	1897	○
勝浦鞆雄『皇国小史』	1897	○
修文館編輯部『新撰皇国史』	1897	○
高橋健自『中等国史教科書』	1897	○
高津鍬三郎『新編本邦小史』	1897	○
藤岡作太郎『国史綱』	1897	○
萩野由之『中学国史』	1897	○
中等学科教授法研究会『中学教程日本歴史』	1897	○
関藤成緒『中等教育皇国新史』	1897	○
東久世通禧『中学国史』	1897	○
笹川種郎『中学教科日本小史』	1897	○
重田定一『中学日本史』	1897	○
谷島喜多郎『日本歴史』	1897	○
高橋光正『新撰日本歴史』	1898	○
岡田辰次郎『新体皇国小史』	1898	○
中等学科教授法研究会『中学教程新撰日本歴史』	1898	○×
大森金五郎『国史読本』	1898	○
石田新太郎『中等教科日本歴史』	1898	○
岡部精一『中等帝国小史』	1898	○
菊池謙二郎『新体皇国史綱』	1898	○
重田定一『日本歴史』	1898	○
小中村義象『改刪日本史要』	1899	○
山崎庚午太郎『中学日本史要』	1899	×
藤岡作太郎『新編日本史教科書』	1899	○
新保磐次『新編内国小史』	1899	×
峰岸米造『内国史綱』	1899	×
松島剛『帝国史要』	1899	○
横山達三『初等帝国史』	1899	○
大町芳衛『中等教科帝国史』	1899	○
棚橋一郎『新編日本史要』	1899	○
藤井乙男『新撰帝国小史』	1899	○
伊東尾四郎『中等教科日本小史』	1900	○×
本田浅次郎『新編日本歴史』	1900	○
高桑駒吉『新編皇国史要』	1900	○×
峰岸米造『本邦史綱』	1900	○
大林徳太郎『中学日本史要』	1900	×
堀正一『中学国史紀要』	1900	○×
箕田申之『中学日本史』	1900	○
峰岸米造『国史教科書』	1901	×
高橋健自『新撰国史』	1901	×
和田万吉『日本歴史大綱』	1901	○
伊東尾四郎『中等教科国史要』	1901	○
勝浦鞆雄『国史綱』	1901	×
中野礼四郎『帝国歴史』	1901	○
青木武助『中等教育日本の歴史』	1901	×
笹川種郎『新中学日本史』	1901	○
沼田頼輔『中等日本歴史』	1901	○
中等教育研究会『問答体日本歴史』	1901	○
普通教育研究会『帝国史要』	1901	×
興文社『国史鈔』	1901	○
磯田良『日本歴史大綱』	1902	○
森六蔵『新編日本歴史』	1902	○×
津田左右吉『国史教科書』	1902	○
興文社『中等日本歴史』	1902	×
西浦泰治『日本歴史教科書』	1902	×
本多浅次郎『日本歴史教科書』	1902	×
藤岡作太郎『日本史教科書』	1902	×
有賀長雄『改訂中学校用国史教科書』	1902	×
新保磐次『日本歴史』	1902	×
重田定一『中等国史略』	1902	×
重田定一『初等中学国史』	1902	×
萩野由之『中学国史　一年級用』	1902	×
高橋健自『中学日本小史』	1902	×
棚橋一郎『日本歴史教科書』	1902	×
本多辰次郎『中等教育帝国史要』	1902	×
有賀長雄『国史教科書』	1902	×
本田浅次郎『日本帝国史』	1902	○
斉藤斐章『補習帝国史綱』	1902	○
斉藤斐章『五年級用日本歴史』	1902	○
普通教育研究会『日本史要』	1903	×
大森金五郎『中学日本歴史教科書』	1903	○×
横井時冬『国史攬要』	1903	×
佐藤小吉『中等教科日本史綱』	1903	×

このように尋常中学校教科細目、さらには中学校教授要目で乱の呼称が承平天慶の乱とされたことにより、中学校教科書では承平天慶の乱の呼称が一般的となるのである。

以上、小学校と中学校の教科書における将門・純友の乱の呼称をみてきたが、小学校教科書は、明治初期には乱の呼称がないものが多いが、その後は昭和に至るまでほぼ天慶の乱の呼称が用いられた。これに対し、中学校教科書は当初は天慶の乱であったが、一八九八年の尋常中学校教科細目、一九〇二年の中学校教授要目制定以降はその多くが承平天慶の乱になる。つまり、明治二〇年代までは小学校教科書・中学校教科書ともに天慶の乱だったのだが、明治三〇年代以降は両者の間で呼称に違いがみられるのである。

七　戦後における将門純友の乱

本章では、戦後になると将門純友の乱がどのように称されるかをみていきたい。

表6は、戦後に出された概説書にみえる将門純友の乱の呼称を調べたものである。これによると、一九八〇年代までは、一部を除き、いずれも承平天慶の乱が使用されている。明治時代末から昭和戦前期は、承平天慶の乱が多くなったとはいえ、天慶の乱も少なからず用いられたのだが、戦後になると天慶の乱はほとんどみられなくなるのである。そして、最初に述べたように、近年は天慶の乱の呼称が増えている。

承平年間の純友については、一九五〇年代までは、海賊の首領として日振島を根拠に官物私財を劫掠していたとするものが多く、一九六〇年代からは、海賊の首領であったが承平六年に懐柔のため追捕宣旨が下されたという考えが一般的となる。ただどちらも承平年間の純友は海賊首であったとする点は同じなので、呼称は承平天慶の乱が用いら

表6　戦後の概説書

編著者	書名	出版社	発行年	乱の呼称	承平年間の純友
豊田　武	概説日本歴史	大阪教育図書	1948	承平天慶の乱	任満後も帰京せず、日振島に拠って海賊を操る
家永　三郎	新日本史	富山房	1949	承平天慶の乱	−
史学会	日本史概観	山川出版社	1950	承平天慶の乱	海賊を糾合し、日振島に拠って勢威を振るう
芳賀幸四郎	日本史新研究	池田書店	1950	承平天慶の乱	−
坂本　太郎	日本史概説	至文堂	1950	承平天慶の乱	海賊首として官物私財を強奪、一旦は紀淑人に恭順
赤松　俊秀・柴田　実	京大日本史2 古代国家の展開	創元社	1951	天慶の乱	−
西山松之助・若井　秀夫	絶対日本史	研数書院	1951	承平天慶の乱	承平6年に日振島を中心に海賊を働く
石井　良助	日本史概説	創文社	1953	承平天慶の乱	−
石母田　正・松島　栄一	日本史概説Ⅰ	岩波書店	1955	承平天慶の乱	承平6年に伊予国で反乱を起こす
藤木　邦彦	日本全史3 古代Ⅱ	東大出版会	1959	承平天慶の乱	伊予国に土着し、日振島によって瀬戸内海を荒らす、承平6年に紀淑人は追討宣旨を与えて懐柔
岡田　章雄他	日本の歴史3 平安貴族	読売新聞社	1959	将門と純友の乱	任満後も帰京せず、承平6年には海賊首となり、日振島に拠って猛威を振るう
高柳　光寿・渡辺　実	世紀別日本史	明治書院	1961	承平天慶の乱	−
宝月　圭吾・児玉　幸多	日本史概論	吉川弘文館	1962	承平天慶の乱	−
井上　清	日本の歴史	岩波書店	1963	将門純友の乱	土着して土豪の首領となり、承平6年に反乱を起こす
北山　茂夫	日本の歴史4 平安京	中央公論社	1965	承平天慶の乱	任満後も帰京せず、海賊の首領となる、承平6年に紀淑人は追討宣旨を下して懐柔
黒田　俊雄	体系日本歴史2 荘園制社会	日本評論社	1967	承平天慶の乱	−
柴田　実	国民の歴史6 王朝文化	文英堂	1968	天慶の乱	−
目崎　徳衛	日本歴史全集4 平安王朝	講談社	1969	承平天慶の乱	海賊の首領として官物私財を掠奪、承平6年に紀淑人に懐柔され海賊を追捕
北山　茂夫	王朝政治史論	岩波書店	1970	承平天慶の内乱	海賊の首領となるが、承平6年に政府は海賊追捕を命じて懐柔
坂本　賞三	日本の歴史6 摂関時代	小学館	1974	承平天慶の乱	土着して海賊の首領となるが、承平6年に政府は海賊追捕の宣旨を下して懐柔
林　陸朗	古代末期の反乱	教育社	1977	平将門の乱、藤原純友の乱	任満後も帰京せず、海賊の首領となる、承平6年に政府は追討宣旨を下して懐柔
(上横手雅敬)	日本の歴史4 平安貴族	研秀出版	1977	承平天慶の乱	土着して海賊の首領となる、承平6年に政府は懐柔のため海賊追討を命じる
笹山　晴生	日本古代史講義	東大出版会	1977	承平天慶の乱	土着し海賊を率いて承平6年以後各地を侵略
井上光貞他	日本歴史大系1 原始・古代	山川出版社	1984	承平天慶の乱	任満後も伊予国内に住み、瀬戸内海の海賊を糾合して首領となる
棚橋　光男	大系日本の歴史4 王朝の社会	小学館	1988	承平天慶の乱	承平6年には海賊の首領となる
網野　善彦	日本社会の歴史	岩波書店	1997	天慶の乱	警固使として紀淑人と共に海賊の鎮圧・懐柔にあたる
保立　道久	日本の歴史3 平安時代	岩波書店	1999	承平天慶の乱	−
朝尾　直弘他	要説日本歴史	東京創元社	2000	承平天慶の戦争	−
佐々木潤之介他	概論日本歴史	吉川弘文館	2000	天慶の乱	承平年間に紀淑人とともに海賊追捕に活躍
下向井龍彦	日本の歴史7 武士の成長と院政	講談社	2001	天慶の乱	承平6年に海賊追捕宣旨を受け、警固使として伊予に下り、海賊集団を投降させる
吉川　真司	平安京	吉川弘文館	2002	天慶の乱	承平6年に追捕宣旨を受け、海賊追捕に功績をあげる
宮地　正人	世界各国史1 日本史	山川出版社	2008	承平天慶の乱	海賊追捕に加わったことにより、承平6年に海賊が投降
川尻　秋生	日本の歴史4 揺れ動く貴族社会	小学館	2008	天慶の乱	承平6年に警固使として追捕宣旨に基づき海賊を鎮圧
佐々木恵介	天皇の歴史3 天皇と摂政・関白	講談社	2011	承平天慶の乱	土着して海賊行為を働いたり、逆に海賊追捕をしたりする
川尻　秋生	シリーズ日本古代史5 平安京遷都	岩波書店	2011	天慶の乱	承平6年に追捕宣旨を受け、海賊を鎮圧

れたのであろう。

次に、戦後の高校と中学校の教科書について調べてみたい。

表7は戦後の高校日本史教科書にみえる乱の呼称を調べ[35]、それぞれの教科書の数を五年ごとに集計したものである。Aは乱の呼称を将門純友の乱（将門の乱、純友の乱）とする、あるいは将門純友の名のみみえるもの、Bは乱の呼称を承平天慶の乱とするもの、Cは乱の呼称を天慶の乱とするものである。この表によると、一九五〇年代前半まではBよりもAの方が多いが、同後半からBが多くなり、一九六〇年代以降はほとんどがBとなる。Cは一九五〇年代後半の二例のみである[36]。つまり、一九五〇年代までは将門純友の乱などとするものも多いが、一九六〇年代以降は乱の呼称は承平天慶の乱でほぼ統一されるのである。

中学校教科書について同様の調査を行ってみると、ほとんどが将門や純友が反乱を起こしたことのみを記す、あるいは将門純友の乱（将門の乱、純友の乱）としていて、年号を用いた乱の呼称がみえるのは一部のみである[37]。

最後に、日本史関係の辞書の項目（見出し）を調べてみたい。表8は各辞書における承平天慶の乱と天慶の乱の項目の有無を調べたものである。○は項目と解説文があるもの（本見出し）、×は項目がないもの、△は項目はあるが解説文はないもの（仮見出し）である。戦前の辞書は一つしか見つけられなかったが、天慶の乱で項目が立てられている。戦後は本見出しはいずれも承平天慶の乱である。二〇〇〇年代になると仮見出しではあるが天慶の乱の項目のある辞書が増えている。これは近年の研究動向が反映したものであろう。その一方で、一九五〇―八〇年代の辞書にも天慶の乱の仮見出しのあるものが少なからず見うけられる点は興味深い。これは、戦後になると概説書や教科書では天慶の乱の呼称がほぼ消えるが、戦前は天慶の乱が少なからず使用されていたことの名残かもしれない。

以上、戦後における将門純友の乱の呼称を調べてきたが、戦後は天慶の乱はほとんど用いられなくなり、承平天慶

の乱が一般的となる。つまり、戦後になると承平天慶の乱の呼称が定着するのである。

表７　戦後の高校教科書

	A	B	C
～1954	12	3	0
1955～	9	22	2
1960～	1	22	0
1965～	1	33	0
1970～	1	32	0
1975～	0	15	0
1980～	0	25	0
1985～	0	26	0
1990～	0	28	0
1995～	1	31	0
2000～	0	12	0
2005～	0	9	0

表８　日本史関係辞書

辞　書　名	出　版　社	出版年	承平天慶の乱	天慶の乱
国史大辞典	吉川弘文館	1908	×	○
日本史辞典	創元社	1954	○	×
日本歴史大辞典	河出書房新社	1959	○	×
岩波小辞典日本史	岩波書店	1957	○	×
日本史小辞典	山川出版社	1957	○	△
標準日本史辞典	吉川弘文館	1962	○	△
日本史事典	平凡社	1983	○	△
国史大辞典	吉川弘文館	1986	○	△
新編日本史辞典	東京創元社	1990	○	△
日本史総合辞典	東京書籍	1991	○	×
日本史大事典	平凡社	1993	○	×
古代史事典	大和書房	1993	○	×
平安時代史事典	角川書店	1994	○	△
日本史用語大事典	新人物往来社	1995	○	×
日本史広辞典	山川出版社	1997	○	×
新版日本史辞典	角川書店	1999	○	×
日本史辞典	岩波書店	1999	○	×
日本歴史大事典	小学館	2000	○	△
日本史事典	平凡社	2001	○	△
日本史事典	朝倉書店	2001	○	×
日本古代史事典	朝倉書店	2005	○	×
日本古代史大辞典	大和書房	2006	○	△

おわりに

将門純友の乱の呼称がどのように変化してきたのかをみてきたが、承平天慶の乱という呼称は比較的新しいものであったことが明らかになったように思われる。前近代では将門純友の乱は天慶の乱と呼ばれることが多く、明治に入っても天慶の乱が一般的であった。承平天慶の乱の呼称が多く用いられるようになるのは明治時代後半以降である。しかし、天慶の乱も使用されていて、戦前までは天慶の乱と承平天慶の乱の両方が用いられていた。承平天慶の乱が定着するのは戦後になってからのことである。

こうしたことを踏まえ、あらためて天慶の乱か承平天慶の乱かを考えてみると、乱の呼称はやはり天慶の乱が適切であろう。理由の一つめは、承平年間と天慶年間とでは戦乱の規模が質的にも量的にも大きく異なっていることである。このことについては最初に述べた通りである。理由の二つめは、承平天慶の乱とする根拠がもはや失われていることである。上述したように、承平天慶の乱の呼称があらわれるのは明治になってからであり、それは純友の乱が承平年間から始まると考えられたためである。しかし、周知のように最近の研究によってこのことはすでに否定されていて、もはや承平天慶の乱と呼ぶ積極的な理由はみあたらないのである。

天慶の乱という呼称は一般的にはまだなじみのないものである。しかし、今後は承平天慶の乱ではなく天慶の乱の呼称が用いられるべきであろう。

註

(21) 岩井忠熊「日本近代史学の形成」(『岩波講座日本歴史』別巻一、一九六八年)。

(22) 『国史大辞典』第五巻(吉川弘文館、一九八五年、執筆は大久保利謙)。

(23) 三浦録之助「天慶の乱を論ず」(『史学会雑誌』三六、一八九二年)、坪井九馬三「天慶乱の新史料」(『史学雑誌』四五、一八九三年)。

(24) なお、川上多助『綜合日本史大系三　平安朝史』は、伊予掾藤原純友は任満ちても帰京せず、承平六年には日振島を根拠地として官物私財を抄掠していたとする一方で、紀淑人による海賊平定と純友の関係については「純友が淑人に降参したことは日本紀略その他の史籍にも見えざるのみならず、本朝世紀には海賊追捕の宣旨を純友に賜はったことが載せてある。それで今こゝに推測を下せば、淑人が海賊平定の方策として、朝廷に奏請してこの宣旨を賜はって純友を懐柔し、その部下に対しては、生活の安定を与えてこれを招撫したものでなかろうか、帰降者の中に純友の名を挙げないのもそのためであらうかと思ふ。」としている。つまり、承平六年の追捕宣旨は海賊首領である純友への懐柔策とするもので、後章でみるように戦後に受け継がれていく考え方である。

(25) 以下の解説は『国史大辞典』第五巻(吉川弘文館、一九八五年、執筆は坂本太郎)による。

(26) 承平天慶の乱が呼称として使われるようになるもう一つの理由は、一九〇二年の中学校教授要目制定であったように思う。このことは次章で詳しく述べるが、一九〇二年以降旧制中学校教科書では承平天慶の乱が用いられるようになる。このため中学参考書を兼ねる概説書では天慶の乱ではなく承平天慶の乱とされたようである。青木武助『参考日本大歴史』、高桑駒吉『日本通史』などは、編目は中学校教授要目に拠ったとあるので、おそらくは教科書の用語に合わせるため承平天慶の乱としたのであろう。

(27) 小学校・中学校の教科書及びその歴史については、仲新『近代教科書の成立』(日本図書センター、一九八一年、初出は一九四九年)、『日本教科書大系　近代編』一八―二〇巻(講談社、一九六二・一九六三年)、鳥居美和子『教育文献総合目録　第三集　明治以降教科書総合目録　Ⅰ小学校編』(小宮山書店、一九六七年)、同『教育文献総合目録　第三集　明治以降教科書総合目録　Ⅱ中等学校編』(小宮山書店、一九八五年)、松島栄一「歴史教育の歴史」(『岩波講座日本歴史』別巻一、一九六八年)、海後宗臣『歴史教育の歴史』(東京大学出版会、一九六九年)、教科書研究センター編『旧制中等学校教科内容の変遷』(ぎょうせい、一九八四年)、

『明治以降教育制度発達史』（龍吟社、一九三八年）、『近代日本教育制度史料』（講談社、一九五六年）などを参照した。また、教科書の内容調査は、国立国会図書館近代デジタルライブラリー、国立教育政策研究所教育図書館、東京書籍株式会社附設教科書図書館東書文庫、公益財団法人教科書研究センター附属教科書図書館、愛媛県立図書館、愛媛県総合教育センター、愛媛大学中央図書館などの教科書画像資料及び実物を用いて行った。

(28) 鳥居美和子『教育文献総合目録　第三集　明治以降教科書総合目録　Ⅰ小学校編』（註（27）前掲書）には二九九種類の教科書が載せられているが、地図や辞書風のものなどを除き、ここには一八〇種類のみを掲げた。なお、著者が複数の場合は筆頭者のみとした。

(29) 承平天慶の乱とするのは『改正史略』と『日本略史』である。『改正史略』は『史略』を改めたもの、『日本略史』は先述したように三年前に出された『史略』を充実させたものである。『史略』、『改正史略』、『日本略史』はいずれも木村正辞の編集だが、乱の呼称が後二者では天慶の乱から承平天慶の乱に変わっている。ところが同じく文部省が木村正辞に編集させた一八七七年の『国史案』ではまた天慶の乱にもどっている。この間の事情は不明だが、これらを除くと次第に乱の呼称を天慶の乱とするものが増える傾向にあるといえよう。

(30) 一期は一九〇三年～、二期は一九〇九年～、三期は一九二〇年～、四期は一九三四年～、五期は一九四〇年～、六期は一九四三年～、である。なお、五期は高等小学校用はない。

(31) 中学校教科書は、鳥居美和子『教育文献総合目録　第三集　明治以降教科書総合目録　Ⅱ中等学校編』（註（27）前掲書）に載せられている三〇七種類の教科書のうち二七九種類を調査したが、天慶の乱あるいは承平天慶の乱の用語がみえないものや同一教科書の改訂版（呼称が同じ場合）などは表から省いた。なお、著者が複数の場合は、筆頭者のみ掲げた。

(32) 中学校教授要目はその後一九一一年、一九三一年、一九三七年、一九四三年に改定される。一九一一年の改定で項目は約半分に減るが、「承平天慶ノ乱」は残されている。一九三一年以降はさらに簡略化が進み、「承平天慶ノ乱」の項目はなくなる。

(33) 前章で述べたように、明治二〇年代までは天慶の乱の呼称が一般的だったので、一八九八年の尋常中学校教科細目調査報告書で承平天慶の乱が採用されたのは学界の研究動向によるものとは考えにくい。紙数の関係上詳細は省くが、早くから承平天慶の乱として

いる新保磐次『小学日本史』（一八八八年）が実質的には新保磐次と三宅米吉の共著であったこと、尋常中学校教科細目調査の歴史科調査委員に三宅米吉の名前がみえることなどから、これには三宅米吉の意向が関わっていたものと推測される。

（34）一九四四年の国定教科書『中等歴史』には乱の呼称はみえないが、一九四五年の『歴史　皇国編』では承平天慶の乱とされている。

（35）戦後の高校・中学校の教科書の種類及び使用年度については、公益財団法人教科書研究センター附属教科書図書館の教科書目録情報データベースを用いた。これによると高校日本史教科書は三一六種類あるが、一九九四年から使用されている日本史Ａ（二九種類）は、前近代の記述がきわめて簡略あるいはほとんどないため、この表の対象外とした。なお、使用開始年度を各教科書の年次とした。

（36）柴田実『最新日本史』（文英堂、一九五五年）、同『最新日本史　改訂版』（同、一九五八年）。

（37）前掲の教科書目録情報データベースによると戦後の中学校歴史教科書は約二〇〇種類ある。このうち天慶の乱とするものは一九五〇年代に二種類、承平天慶の乱とするものは一九五〇―一九七〇年代に一〇種類ある。また将門の乱を天慶の乱とするものが一九五〇年代に三種類（著者・出版社は同じ）ある。ただし、これらの多くは本文ではなく頭注や脚注での注記である。なお、戦後の小学校教科書には将門純友の乱の記述はほとんどみられず、あっても名前が記される程度である。

※本研究はＪＳＰＳ科研費二二五二〇六七七の助成を受けたものです。